

京鹿子

昭和二十二年三月一日第三号郵便物検査
印正十八年十一月一日発行
東京六三三番地大塚町一丁目三三番地

11月号

— 近 詠 —

桐は実に
丸山佳子

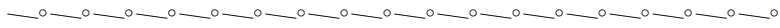
線 香 は 日 本 の か を り 盆 終 る

お 地 蔵 の 賽 を し ら べ に 小 鳥 来 て

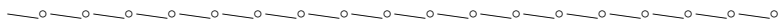
音 の 無 い 川 を 見 下 ろ し 名 の み 秋

秋 扇 ゆ か り と 言 へ ば 小 指 ほ ど





きかんの気の草が木になる花蓬
秋暑し大儀に下ろす踏切り棒
色鳥に仁王の御目よそよそし
桐は実に音沙汰ないを良しとせむ
食み喋り舌一枚で秋思消ゆ
この冬はころばぬやうに南無そはか



豊田都峰

清響集 その六十七

た た な づ く 鉾 杉 の 嶺 々 涼 風 充 つ
手 の な り に 風 を し づ め の を ど り な る
紫 蘇 の 花 里 山 ま る く 日 を お と す
夕 蟬 や 石 仏 も ま た う す れ ゆ く
秋 声 を ひ と つ こ ぼ し て 葉 の さ ゆ れ
山 霧 に 置 き 去 り に す る 影 法 師
あ ま さ ず に 湖 国 を 入 れ て 秋 天 下



一 望 の 座 は 秋 麗 の 遠 伊 吹
秋 分 や 半 々 は 半 分 で な し
待 宵 や ひ と つ の 草 に な り て よ り
藤 袴 高 さ は 器 量 の 風 見 知 り
地 平 ま で 帰 燕 の 空 の 昨 日 今日

「俳句十二月号」入門特集 掲載

「俳句朝日十二月号」わが結社 掲載

「俳句あるふあ十二月号」今日の俳句十句 出稿

「俳句あるふあ増刊号」現代俳句の三百人 出稿

秀華採集

河鹿笛耳の奥まで蒼くなる

谷口文子

美声を発する雄の河鹿。それを聞いている状態がたいへん詩的に描写されている。

落し文ふいに目隠しされそう

佐々木 紗 知

葛の蔓ゆくへ探しの七曲り

川 村 瑠 璃

前句の落し文への関心、落とした側への思い入れによるひとつのドラマの具体的な表現と頂く。後句の、探す心の具体的な表現もすばらしい。突き詰めて具体的に表現するのが、俳句。

鈴鹿 仁

月うさぎ

兀然の一言のずれ露冴ゆる
月うさぎ雲と遨ばむをどり町
夕雲は迅し人恋ふ風の盆
紫蘇の実や糸口の糸解れしも

萩まつり三句

萩蝶に小花の魅せし彩が好し
人の意とせず宮萩の露こぼす
萩に蝶かけがへのなき宮の風

近 詠

宇都宮滴水

冬ひばり

十月や記憶の中のをんな坂
行間の乱るが俛に虫すだく
曇天に鮭の産卵まだつづく
穴まどひ顔貌とくに変らざり
心不全夜長の灯し暗すぎて
天高し綽名で記す伝言板
枯すすき聴えさうなる人の声
冬ひばりむかしを残す流れ橋

神麓集



今朝の秋 藤岡 紫水
 竹林の風笛となる星月夜
 足許の徑に風あり今朝の秋
 火点せば風の流れて地藏盆
 二々夜さの雨に洗はれ銀河濃し
 振り向けば恥じらふ風の醉芙蓉

角 直指

山国川源流の星合歎万朶
 鎖渡し難所のむかし洞の梅雨
 巖通す一念の鑿跡の梅雨
 享祿の世よりの洞の梅雨昏し
 深耶馬は温泉のふるさと河鹿鳴く

和語 彌寝 瓶史
 陶枕に馴れぬ夢にて躓けり
 面映ゆく青鷺光る魚逸らす
 パン屑の記憶辿りて小鳥来る
 酸漿の星の嚙矢に開きある
 和語もちて虫声訳す異国僧

吉田 多美
 バス停に無人賣あり蟬はやす
 酔芙蓉この縁談はまとまらぬ
 反りて乗る焼鮎の目まだ碧し
 夕立に雲水経列みだれざり
 病む女と昔語りの団扇風
 夕立にわだかまり解け一つ傘

丹生をだまき

熟れトマトすばつと切りたし包丁研ぐ
 遠雷や空気がどんどん重くなる
 向日葵凶苦惱にねぢれし筆の跡
 昼寝覚しばらく続く浮遊感
 朝露の飾る蜘蛛の巣佛はずに

山田をがたま
 汗知らず快適にして病の身
 炎暑来る夫と娘のゐて恵みの刻
 病室の広さしみじみ昼寝覚め
 病院食に西瓜一と切れ色を添ふ
 再入院約し炎暑の中帰宅

神麓集



梅雨晴の一日無料のバスを待つ
斑鳩の一塔雷禍に續く悲話
隣家の猫居付きて庭の水飲みに
音合せの如き細音の朝ちちろ
銚渡御の囃子は欄に腰預け

奥村 鷹尾

汗陰陽働く汗に恥ずも汗
目から火を顔から鱗落とす汗
盆近し弘子の名乗り耳朶に棲む
寿子逝く秋の悲しき夢のなか
李枝子逝く汗ふくさまに涙ふく

岩崎 憲二

海くらげ増え過ぎ気骨など知らず
梅雨寒し整形外科の荒道具
水色のアロマキヤンドル光が涼し
音触れてグラスを洗ふレース越し
白昼や水に火照りし青睡蓮

荻野 千枝

地続きの寺しんかんと星月夜
土の橋木の橋渡る星月夜
星月夜箏笥の位置を変へてみる
稜線に潜む荒武者星月夜
星月夜道より低き屋並あり

星月夜 柴田 朱美

皮剥いて桃の秘密を解き放す
まつさらな闇にランプの点く晩夏
変身に疲れし魔女の夏休み
空蟬の落ちし数だけ夢消えぬ
晩学の出発点は花野とす

松田 都青

脇役といふもの大事キヤベツ剥く
夏寒し一寸先の落し穴
貝風鈴音色こぼるゝ黄昏どき
薄雪草放牧の原果見えぬ
水中花大きい声をおさへをり

船越 美喜



京鹿子集

豊田都峰選

曇り後雨の危ふさ星祭

羽化の夏花嫁衣裳の白づくめ

河鹿笛耳の奥まで蒼くなる

梅雨明けや介護かさねる老夫婦

水平は池の寧らぎ枝蛙

朝顔が朝顔を生みつづけをり

雨上るいろめきたちし青トマト

晩年は鍵一つ持ち遠花火

落し文ふいに目隠しされそうで

明るさも闇の深さに合歡の花

高槻 谷口 文子

千葉 佐々木紗知

朝は蟬昼は鴉に夢破る

海水浴泣きし倅今は子に厳し

葛の蔓ゆくへ探しの七曲り

梅漬けて母の健在メールする

半夏生化粧覚へし十七才

雲涼し朝明の堤老詩人

湯あがりの酒も又よき端居かな

独り住み訪ふ人もなし氷菓食ぶ

妻の忌や仏間に遠く祭り笛

曇天に花火があがる仏の日

枚方 川村 瑠璃

所沢 牧野 麦芽